

第26回 2014年6月25日(水)

ゲスト 田中文夫(毎日放送 元専務取締役、現放送映画製作所社長)

テーマ テレビ番組に新機軸「突然ガバチョ！」から「夜はクネクネ」へ  
～新しい路線が生まれた1980年代～

主な内容

- ◎大激戦区の火曜22時台に新路線のバラエティー番組で挑む
- ◎鶴瓶で既成のテレビ番組 突き破る
- ◎「ガバチョ」(鶴瓶の好きな言葉)と「突然」(私の提案)併せ タイトル決まる
- ◎「つるべタクシー」「テレビにらめっこ」「突然!生放送」番組支えた三つのコーナー
- ◎鶴瓶さんはその当時 芸能人とのトークは苦手だった
- ◎“笑ってはいけない世界”をつくる 大ヒット「テレビにらめっこ」
- ◎バラエティーだが 生放送枠にこだわった 番組のパッケージ感打ち破る
- ◎ラジオの狭いスタジオに“四十七士討ち入り” ラ・テサイマル放送で大混乱
- ◎鶴瓶の一番記憶に残っている番組は「自遊空間えっくす」
- ◎「音」と「絵」がバラバラ 奇抜な演出に視聴者から“テレビ壊れた”
- ◎「夜はクネクネ」スタートまもなく10% 「段取り」排し「リアルさ」追求
- ◎1980年代のテレビ界 番組の中軸に既成勢力より新勢力を発掘
- ◎「4時ですよーだ」に若手芸人 ダウンタウン起用
- ◎「2丁目劇場」の雰囲気そのまま茶の間へ 主婦層にアピール
- ◎テレビ現場の固定観念取り払う 制作のプロセス変える
- ◎1分刻みの視聴率にこだわる若い制作者 近視眼的な視聴率主義の弊害
- ◎M1, F1 (20-34歳)層の急激な減少 15年後のテレビ界に激変か

司会者 皆さん、こんにちは。お待たせいたしました。多分、今日は寝不足の方も何人かい  
らっしゃるかもしれません。私は、7時半頃起きましたが、案の定という感じが  
いたしました。なんとなく迫力に欠けた今回のワールドカップ（日本 1勝もできず  
敗退）で、さあ明日からは、あるいは今日からは何を見ようかなと思っている方  
がいるのではないかなと思います。

さて6月の例会で、本日は元毎日放送専務取締役で現在、放送映画製作所社長の田  
中文夫さんをお迎えいたしました。まさに現役の社長さんでいらっしゃいますの  
で、本当にお忙しいところ、時間を割いていただきました。田中さんは1948年、  
昭和23年のお生まれです。東京大学をご卒業後、1972年、昭和47年に毎日放送  
に入社しておられます。ラジオ番組「MBS ヤングタウン」のディレクターを経てテ  
レビ番組の制作へ移られまして、2001年ラジオ局長、それから2003年取締役編成  
局長、2005年に常務取締役、2007年に専務取締役、事業局編成制作報道担当をさ  
れていました。2011年、放送映画製作所の社長に就任されました。

「突然ガバチョ！」という忘れようにも忘れられないような名前の番組。「4時で  
すよーだ」、「夜はクネクネ」、それから「自遊空間えっくす」とか、ネーミングだ  
け伺っても、非常に何か新しいことをおやりになろうとされていた時代があった  
んじゃないか、テレビの特性である可能性を広げてきた方ではないかなと推測し  
ております。毎日放送の社史の一部を見てみますと、昭和50年代後半、ローカル  
に徹し、しかも従来のテレビ番組の定型を打ち破る柔軟な発想の一連の番組がMBS  
テレビを特徴づけることになった、というようなことが書いてありました。

このあたりが、今日お話をいただくきっかけになったことではないかなと思っ  
ています。ご承知の通り「突然ガバチョ！」というのは非常に高い視聴率を誇りまし  
た。と同時に鶴瓶さんの可能性というか、ものすごく面白いものを引き出したの  
ではないかなということで、このあたりのお話をさせていただきたいと思います。改め  
てご紹介申し上げます。放送映画製作所の社長の田中文夫さんでいらっしゃいま  
す。よろしく願いいたします。

田中氏 田中文夫と申します。よろしく願いいたします。今日はこういう場に、呼んで  
いただきましてありがとうございます。いまご丁寧なご紹介がありましたが、私なり  
に簡単な自己紹介をさせていただきます。大学を出てすぐ毎日放送に入りまして、  
40年ほど勤務いたしました。そのあと子会社の放送映画製作所という会社に移り  
まして、今、社長をやっております。もう3年が終わりました。先週、株主総会が  
ありまして続投ということになったんですが、私自身もそろそろという時期が近  
付いておるなと思っていて、この業界を去る前に、自分が考えてきた非常にささ  
やかなことなど、何かまとめておきたいなという風に思っておりました。そんなとき  
、ちょうどこういう機会をいただき大変ありがたく思っております。ただかなり思

い込みの強い人間でありますので、客観的に見て、皆さんがお聞きになって面白いかどうか微妙なところだと思いますが、そこは頑張って話したいと思っておりません。ちょっとだぶりますが自己紹介です。昭和47年、1972年に毎日放送に入社します。大阪万博の2年後です。最初の2年はラジオ営業で、今、横に座っていらっしゃる近津さんの部下になりました。今日、横にいらっしゃるんで、びっくりしました。そのあと6年がラジオ制作。それで昭和55年、1980年、31歳のときにテレビ制作に異動致します。それから12年間、テレビ制作の現場で働くということになります。今日お話しさせていただく「突然ガバチョ！」とか「自遊空間えつくす」とか「夜はクネクネ」「4時ですよーだ」とかは全部その12年間の中の出来事になります。まず今日どんな話をするかなんですが、順番を言っておきます。

#### <大激戦区の火曜22時台に新路線のバラエティー番組で挑む>

最初に「突然ガバチョ！」とはどういう番組だったのか、次に「自遊空間えつくす」とはどういう番組だったのか、その次に「突然ガバチョ！」「夜はクネクネ」という新しい路線はどうしてヒットしたのか、どんな時代だったのかということ。そのあとに「4時ですよーだ」という現象は何だったのかということですね、そして時間があれば、現在の地上波のテレビについて、10年後はテレビ・ラジオはどうなるのだろうか、目次的にはそういう流れになります。私は、もともと言葉がぺらぺら出て来ないタイプで、喋りたいことを忘れてしまいます。今日はメモを書きましたので老眼鏡をかけて、下を向いて喋ることが多いですが、ひとつよろしくお願いたします。

最初は「突然ガバチョ！」についてです。これは昭和57年、1982年の10月に始まりました。毎週火曜日の22時、夜の10時から1時間でした。当時の番組表を見ると一目瞭然なんですが、もの凄い大激戦区でした。6チャンネルの朝日放送は「プロポーズ大作戦」、8チャンネルの関西テレビは自社制作の大型時代劇、10チャンネルの読売テレビは火曜サスペンス劇場いわゆる火サスと言われる2Hのドラマ枠でした。これはどれも視聴率が20%以上の大番組ばかりで、みんな全国ネットでした。細かい数字は忘れましたが、火曜22時台のセット・イン・ユースは、当時で全部で70%前後だったと記憶しております。ですから、6、8、10のどれも20%あるわけですから、それで60ですね。20かける3で60。ですからどう考えても残りの数字は10未満、それをNHK、NHK教育、それから毎日放送、その他何局かで分けるということになりますから、悲惨なことになります。「突然ガバチョ！」が始まる前の火曜22時の直前は、「地中海殺人事件」という、アメリカから購入したテレビ映画を放送しておりました。視聴率は4%ぐらいでした。たぶん毎日放送の編成は、この時間を捨てていたんだと思います。20%以上の番組が3つもそろっ

ている枠で、MBS だけローカル枠。力を入れたところで、要するに金をかけたところで、成果はそんなに上がらないというのが普通の考え方ですね。購入ものでお茶を濁しておこうかというところだったんじゃないかなと思います。当時の編成部長だった辻一郎さんが今日はいらっしゃらないので聞くことはできないんですが、たぶんそんなことは言っていない状況が社内にあるいは編成内にあつて、何か作らんとあかんという流れになったんじゃないかなという風に推測いたします。

どんな理由があつたのか分かりませんが、ある日、編成の人から「おい、田中。面白い企画があるらしいな。やってみるか」と言われました。お鉢が回ってきたといえますか、あえていえば貧乏くじをひくことになったわけです。そのときの私の置かれている状況は、先ほど言いましたように 1980、昭和 55 年にテレビ制作に異動してきて「突然ガバチョ！」が 1982、昭和 57 年の 10 月ですから、それまで 2 年半あります。その間、何をしていたかという土曜の朝のワイドショー「八木治郎ショー」のディレクターをやっておりました。後に「いい朝 8 時」という名前に変わった番組です。自分の仕事に何の不満も疑問も持たずに 2 年ほど無難にこなしてきたんですが、57 年の 2 月にプライベートで、大きな転機になる事件が起きたんです。それはオフにスポーツ自転車に乗っていて転倒し、左ひざの靭帯がはく離骨折したんです。それで大きな骨を繋いでいる蝶番が外れてしまったわけで、足の付け根から足首までギプスで固められて、2 か月家でじっとしておりました。4 月の終わりごろに出社したんですが、何となく身の置き所がないというか、もちろん心理的にですが、なんかイライラするわけですね。担当していた番組「いい朝 8 時」は当然のことながら、私が休んでいても何の不都合もなく続いているし、当たり前のことですが、そういう状況はあんまり面白くないなど、こういう話であります。仕事の合間に昔の知り合いにかたっぱしから電話をしまして、怪我が治って復帰したということを報告する傍らですね、何か面白いことはないかと皆に聞きまくりました。

#### < 鶴瓶で既成のテレビ番組 突き破る >

何十人か電話をした中で一人の男がこう言ったんですね。「田中さん、情報番組もいいけれども、田中さんといえばやっぱりバラエティーだ」と、「ラジオのときの無茶苦茶やっていた迫力で、テレビでバラエティーをやって一発当てましようや」と、こうアドバイスしてくれたんですね。その男は浜口さんといまして海原千里万里さん、今の上沼恵美子さんが千里と名乗っていた頃の元マネージャーで私がラジオの「ヤングタウン」という番組で、新人の鶴瓶さんを使ってかなり無茶をやっていたのを知っていた一人で、それを大変面白がってくれていたわけです。僕は

それを聞いて、意表を突かれ、なるほど。あんまり身近すぎて気が付かなかったけれども、それはあるなという風に思いました。私が26歳、鶴瓶さんが23歳のときに、深夜2時からのラジオ番組と一緒にやったんですね。それが最初で、それ以来7年経っているわけですが、一番近かった人間を忘れていたなと思いました。

そうか、じゃあ鶴瓶さんと一緒に何かをやろうと決めてからは、よく知っている人間同士なので、話は早かったんですね。全部二人で相談して決めました。タイトルから制作スタッフ、ADに至るまで全部決めました。既成のテレビの番組をなぞって作ろうという風には1度も考えたことがなかった。というのは、鶴瓶も僕もよくテレビを知らなかったから、あんまり経験がなかったからです。むしろその逆でテレビの常識にないことをやろうと、そういうコンセプトは一致していました。中学生とか当時の高校生というのはMBSならラジオで「ヤングタウン」という楽しい世界があるんだけど、それを卒業すると大学生とか若い社会人がそういう楽しい場があるんだろうかと。今の時代ならたくさんやることありますが、当時はそんなにないんじゃないかと僕は思ったわけですね。それをテレビでやったらどうかと。だから大学生、若い社会人のキャバレーを作ろうと。多少、知的なキャバレーを作ろうぜとこういう風になったわけです。

＜「ガバチョ」（鶴瓶の好きな言葉）と「突然」（私の提案）併せ タイトル決まる＞

鶴瓶さんは、「ガバチョ」という言葉が好きでタイトルに使いたいという風に言いました。たぶん「チロリン村とくるみの木」というNHKの番組がありましたけれども、そのイメージがあったんだと思います。私はそれなら「突然」というのを付けようと提案しました。それで30分ほどで決まりました。次にADなんですけれども、ADといっても公開で客を入れてやっていたんで、見栄えのいいやつ、ハンサムなやつにしよう。それも双子がいいと。それでテレビは全くやったことがないやつにしようという風に決めまして。双子っていうのはもちろん当てがあったからなんですけれども。ということになって、その会議室から直接本人に電話をして了解を取るところからスタッフ集めが始まりました。二人とも当時は「ヤングタウン」のラジオのADをやっておりました。それでどういうタイミングで話が出たのか、時期は忘れましたが、鶴瓶さんと私は二人だけの秘密の約束をしました。番組が始まる前です。どういう約束かと言いますと、番組の世俗的な成功失敗は時の運であると。当たるときもあれば外れるときもある。外れたときは放っておいても周りからもうやめなさいと言うだろう。それは簡単なことでやめたらいいと。もし万が一当たったとしても、いつまでも、だらだら続けるのはやめようと。二人がもうこれちょっと面白くないなと、楽しめないな、もう飽きたなと思ったときはやめようねとこういう約束でした。今思ったらですね、番組も始まっていないのに、

ろくにテレビも知らない奴が、何の勝算もない時期に、能天気なことを言っていたなど今は思いますけれども、そこには当時の二人の強い思いがあったんですね。

要するにテレビというのは非常に威張っていて、テレビというシステムに皆、使われている、そんな風感じていました。だからテレビの番組、テレビの枠にはまったものを作ろうというちんけなことは考えずに、つまりテレビとはこういうものだからという固定観念にはなるべく逆らおうと。それを二人のテーマにしました。それで面白いと自分らが思うものを作ると。それ以外のことは一切考えないと。見ている人も面白いと思えば視聴率も取れるだろうと。取れなければ、あっさりやめたらいいんだという風に、何も怖いものはないのでそう考えていたんだろうと思います。

＜「つるベタクシー」「テレビにらめっこ」「突然！生放送」番組支えた三つのコーナー＞

そういう風にして始まった「突然ガバチョ！」の具体的な内容の話になりますが、バラエティー番組ですから、いろいろなことをやります。いろいろな実験もしました。たくさんコーナーが生まれて消えていったんですが、3年間ずっと続いていたのが三つ。「つるベタクシー」、それから「テレビにらめっこ」、最後の生放送には「突然！生放送」という名前を付けていましたけれども、この三つについて、それぞれの思いを述べたいという風に思います。

まず「つるベタクシー」。内容は要するに、毎回来るゲストと鶴瓶さんとの対談です。セットは実物のタクシーをスタジオ内に入れまして、運転席に運転手の制服と制帽をかぶった鶴瓶さんがいて、後部座席にタクシーに手を挙げて乗り込んできたゲストが座ると。そういう座り位置での20～30分のトークを編集して、オンエアは7～8分だったと思います。これは、今までのゲストとのトークの座り位置に対するアンチテーゼといいますか、それを出したつもりです。カメラ方向に、司会とゲストの両方が正対して座る、あるいはハの字に座るのがテレビでは、その当時普通でした。テレビ用にしつらえたというのが丸分かりになる構造ですね。カメラは撮りやすい、照明が当てやすい、客席から見えやすいと。これが常識なんですけど、それをあえて破りたいと。なぜかという、特別親しくない普通の人間同士が、きちっと話をする場合、目を見て向かい合って座るのが普通で、作られた空間で嘘っぽい話をしたくないという非常に抽象的な言い方で、その時は非常にリアリティーを持っていたんですけれども、空々しいゲストトークをしたくないというのが「突然ガバチョ！」の方針ということでした。そんな中で向かい合って話をするっていうのも、ちょっといろいろな事情でできなかったのも、じゃあ自然なシチュエーションとは何かというと、さっき言った運転手と乗客ということでした。鶴瓶さんが流しの運転手で、ゲストがタクシーに乗り込んでコーナーが始まると。台本はなし、

全部アドリブ。決め事ありません。ゲストが後部座席に乗り込んで「お客さんどころまで」というところから始まるというスタイルになります。

< 鶴瓶さんはその当時 芸能人とのトークは苦手だった >

もし、今の時代に今の鶴瓶さんで、ゲストとのトーク番組を考えると多分、こうは考えなかったです。あのときの彼は、実は芸能人とのトークが苦手だったんです。素人を相手にしたときには、めちゃめちゃ天才的なひらめきを発揮するのに比べると、芸能人とのトークは下手ですね。彼は、目と目を合わせて向き合って喋ると、要するにサービス精神があり過ぎて、相手にヨイショし過ぎるんですね。だからタクシーの運転手だったら目と目は合わせないだろうと。もちろんモニターでは見えますけれども、目と目を合わせない。そういうスタイルを取りました。せっかく来てもらっているわけですから、ゲストもほとんどは東京から来てもらっているわけですから、楽しんでもらおうという意識が強すぎるんですね。ヨイショが多いと、見ている人間は面白くもなんともないんですよ。本人もその辺、自分があまりそういうゲストとのトークが上手くないというのは意識していましたから、毎週いろいろな工夫をして、いろいろな作戦をもって臨んだと思います。

現在はTBS系でやっている「A-Studio」とかで、金曜日の夜11時とか芸能人相手に上手いもんですが、当時は彼も悩んでいました。今はちょっと信じられないような感じがしますが、当時はどうやったら自然に喋れるんだろうと。自由に喋れるということはどういうことなんだろうかという疑問が、彼の頭の中いっぱいになっていましてね。喋っていてありきたりではなく、新しい発見がある喋りっていうのはどうしたら成立するんだろうかという、彼の中に研究心がずいぶんありまして。それがこの後、お話する「自遊空間えっくす」の成立につながっていくことになります。これはもう少しあとの話です。

< “笑ってはいけない世界”をつくる 大ヒット「テレビにらめっこ」 >

それから二つ目は「テレビにらめっこ」です。これは「突然ガバチョ！」の中の一歩のヒット企画でした。これは極めて単純な内容です。鶴瓶さんが視聴者からのハガキを読みます。最初に笑った人が退場させられる。それだけのルールです。これが想像以上の反響を呼びました。仕掛けが単純ですので、非常に作る方としてはディテールに凝りました。最初に笑った人が誰かということを見つけて指摘するのを「指摘マン」と名付けて、見るからに怖そうなキャラクターとか、かわいくてぷっと吹き出しそうなキャラクターを織り交ぜて、基本は2週交替でキャラクターを作りました。代表は着ぐるみのカメで、これが一番人気があったわけですが、これは他のいろんなコーナーにも登場しました。それから「指摘マン」が、誰が最初

に笑ったかを指摘する。その指摘された、最初に笑った人をスタジオの外に強制的に連れ出す役もおりまして。これがパンツ一丁のムキムキマンの二人。もの凄い筋肉の若い男性二人が、走って入ってきて、男の子であろうが女の子であろうが抱っこして連れ出すと。連れ出された人は、コーナーが終わるまで収録には参加出来ずに、別室でモニターを見ているんですが、司会者の鶴瓶さんはそうは言わずに、連れ去られる先は退場マンの部屋で、もの凄く怖い部屋であるといつて、そういう風に煽っていますから、恐怖心と笑ってはいけないという緊張とその辺が上手く作用したわけですね。普通はその面白いギャグを聞いて、素直にゲラゲラ笑いたいというのがほぼ一般的な感情なんですけど、笑うと、変なところに連れて行かれて酷い目に遭いそうであると。それに連れ出されるとき、パンツ一丁の裸同然のムキムキ男に、抱えられて退場するというのもめっちゃ恥ずかしいと。スカート履いている子はパンツも見えそうになるというので、笑いたいけど笑えないという相矛盾する気持ちを持ったまま、鶴瓶さんの話術の世界に入っていくわけですね。スタジオでは鶴瓶が、和気あいあいとした空気を流してしまして、普段通りの笑える、わーっと面白い話をしているんですが、一声「テレビにらめっこ」という掛け声が掛かると、笑ってはいけない世界、異次元の時空間にワープするのです。その掛け声が掛かると、スタジオの空気が一気に凍りついて異常な雰囲気になるのですが、それは、テレビを家で見ている人にも十分伝わったようです。

「テレビにらめっこ」という掛け声を掛けてから、ハガキを読んで誰かが笑うまで、家でも息をこらえて、息が苦しかったとかそういうハガキをよく頂きました。放送で「テレビにらめっこ」という怒鳴り声が聞こえると、皆、茶の間にいる人も息を詰めて、自分もその現場にいるかのように錯覚して、かなり深い意味で視聴者参加を体験している状況でした。「テレビにらめっこ」というコールがあつてですね、ハガキを読むまでの時間も結構取ります。そしてハガキを読みます。それで笑いそうになる。こらえる。息をつめた重々しい沈黙が続きまして、次に誰かが笑う。誰かが笑った後なら、いくら笑ってもいいと。ペナルティーはないので、誰かが笑って指摘されると他の人は大爆笑する。司会の鶴瓶さんは、「今、笑ってもいいですよ」と。「リラックスしてもいいですよ」という、その言葉を聞いて、スタジオ中が笑い声に包まれて、緩んだ空気になると思っているのも、つかの間、次の「テレビにらめっこ」というコールが掛かると、それでまた氷の世界になると。その繰り返しですね。その緊張と緩和のダイナミックな時間・空間を鶴瓶さんは見事に仕切っていたように僕は思います。そして誰も真似が出来ないような独自の世界観というか、世界を構築したんじゃないかと。オーバーに言うと、そういう感じがしました。

だからこれは、誰も真似していないんですが、今のテレビで、あえてあの「テレビにらめっこ」の雰囲気に近いのがあるとすれば一つあるんです。それは大みそかに、日本テレビが紅白歌合戦と同時間帯で長時間放送している「絶対に笑ってはいけない」という番組です。ダウタウン他、何人かのお笑いタレントが、いろいろな笑いそうになる状況に放り込まれて、笑うとお尻を叩かれるなど酷い罰を受けるという内容で、これは仕掛けが大がかりで、笑わせるタレントとかにも、もの凄く金がかかっていて豪華で、制作費はめっちゃめっちゃかかっているの、見た目はかなり変わっているんですが、笑ったら罰を受けるというところは一緒ですね。だから基本的なコンセプトは、いろいろプラスαのエンターテインメントの要素が強いものの、たぶんコンセプトの部分では同じかなと思います。これから先は僕の想像ですが、メインのタレントのダウタウンの意向がかなり入っているのではないかな。というのはダウタウンが、高校を出て NSC という養成学校で勉強していた頃、「突然ガバチョ！」のファンだったと聞いたことがあります。NSC という養成学校で稽古が終わって、ダウタウンの浜田と松本と当時担当だった吉本興業の現在の社長の大崎氏と3人で、「突然ガバチョ！」の放送を見ながら「早く売れていつかこんな番組やってみたいな」と話し合っていたというのは大崎氏から聞いたんです。たぶんダウタウンもどこかでそれをしたかったのかなという風には思っています。

「突然ガバチョ！」が終わって、1年半後に「4時ですよーだ」が始まるんですが、ダウタウンと「突然ガバチョ！」について喋ったことは一度もありません。でも、何ていうんでしょうか、「絶対に笑ってはいけない」という大みそかの特番もちよこちょこ見る度に「突然ガバチョ！」と「4時ですよーだ」の目に見えない縁というんですかね、そういうのを感じて面白いなど、僕1人の思いにふけております。

<バラエティーだが 生放送枠にこだわった 番組のパッケージ感打ち破る>

それから三つ目「突然！生放送」についてです。「突然！生放送」と毎週火曜日に収録したVTRの合体したものが「突然ガバチョ！」なんです。この生放送部分は、毎回長さが違います。というのはVTRの長さが毎回違うからなんです。1時間番組は、当時CM込みで54分だったと記憶しているんですが、CM込みのVTRの尺が49分だったら、54引く49は5で生放送は5分。VTRが46分だったら54引く46は8で、生放送は8分ということになります。なぜそんなややこしい形を取っているのか。わざわざ二重の手間をかけて、なぜそんな風にするのかということなんです。当時も何回か聞かれたことがあるんですが、そのときは笑いながら、「毎回決まった長さにするのが面倒臭い」と言っていましたけれども、それは嘘です。これは私1人のこだわりで、生意気ながらこういう風に思っていました。

バラエティー番組というのは閉じたものであってはならないと。要するに終止符を打って完結してはならないと。見ている人に常に問題を投げかける姿勢というか、そういうのを取っておきたいと。だからほころびを持つ構造にしたいと。理屈で言うとそういうことになるんですけども、番組をちゃんと予定調和的に終わらせたくなかったんですね。だからバラエティーだけれど、完パケで納品してそれで終わって、あと流すというパッケージ感が嫌だったんですね。だから逆に言うと、視聴者が番組という作品を見てそれに浸りきって、ああ面白かったなとかいうことで、現実というか苦しきとか忘れてしまったり、変に感動してしまったりするのが嫌だったんです。ですから生放送では思いっきりくだらないことをしたかった。完成度が低ければ低いほどいいというぐらいの勢いでした。それで VTR のパッケージ感を打ち破れたのかどうか分かりませんが、そういう思いでやっておりました。実際くだらない内容が多かったです。しかし、言えるのは、やらせなしの完全なガチで変な緊張感が漂っているということです。だからどこか中継に行くのでも、例えば毎日放送と書いてある中継車に乗って行くと、「あっ、なんかここやるな」と。「火曜日の夜だから『突然ガバチョ！』の生放送、こっからやるんちゃうか」と言われたらだめですから。もう何も書いていない無印のワゴン車で、夜、ケーブル張ったりとかもこっそり張っていましたから。わざわざそんなことをして楽しんでいたんですが、そういう感じだったんです。それで変な緊張感は漂っていました。スタッフもやる前から内緒で、覗きみたいな風にも間違えられながらやっていたわけですから。例えば女子寮の前での視聴率調査。つまり女子寮の前に行って、バンッと全景映してその前に鶴瓶が立つと、あっと気が付きますよね、見ている人は。自分の女子寮の前にいるなど。見ている人は部屋の電気を消そうとかつけようみたいな遊びですよ。それで全体で何十戸か百何十戸かあったら、その内、何人見ているとかそういう視聴率調査ですよ。そんなことをやったりとか。私鉄とか国鉄、当時は JR じゃなくて国鉄とまだ言っていたんですが、その駅の改札口でのど自慢をやったりとか。真っ暗な公園で真夜中のくす玉割りをしたりとかですね。本当にくだらないことをいっぱいやりました。

#### <ラジオの狭いスタジオに“四十七士討ち入り” ラ・テサイマル放送で大混乱>

くだらないことのオンパレードだった中で、私が一番気に入っているのを一つご紹介します。それは「ヤンタン」のスタジオに四十七士が討ち入りしたと。四十七士討ち入りというのが僕一番好きなんです。これはちょっと長くなりますが、ご紹介しますと、私はラジオ制作にいるころ「ヤングタウン」という番組を4年担当していました。その縁でラジオの聴取率調査の日ですね、テレビ・ラジオ、サイマルで、つまり「突然ガバチョ！」と「ヤンタン」とサイマルで放送してくれないか

と。「突然！生放送」というのをやるのを知っていましたから、その時間、サイマルでやってくれという話がきました。それでまだ「突然ガバチョ！」が始まって、スタジオに四十七士討ち入りっていうのが2か月ほどしか経っていなかったんで、まだ視聴率は13%超えたぐらいでした。私は新しい大きなチャンスという風に捉えました。私の出身母体である「ヤンタン」の聴取率をアップさせるということで恩返ししたい。ただしありきたりの方法で、サイマルやるつもりは全くなくて、新しい手法でなおかつ視聴率をアップさせる方法はないかという風に考えまして、前代未聞の無茶苦茶の放送をしてやろうと企みました。「ヤンタン」サイドはですね、決まった時間になったら「突然ガバチョ！」の出演者がラジオのスタジオに来て、楽しくトークをして視聴率が良いテレビの客をそのままラジオにもらおうとそういう計算だったんでしょうけども、こっちは番組のイメージもありますし、そうはいかないと。

この回の生放送のコンセプトはですね、スタッフの中では、ラジオの狭いスタジオを人間で埋め尽くそうということでした。「ヤンタン」のスタジオは普通のラジオのスタジオより多少は広いんですね。生放送用のスタジオで、テーブルには常時マイクは6本置かれていまして、お客さんも入れられて10人ぐらいは入れられる。あれ何坪ぐらいですかね、4、5坪ぐらいはあったと思いますね、もうちょっとあったかもしれません。

時は12月、レーティングの時期でしたから12月でした。ちょうど赤穂浪士の討ち入りが近かったんで、スタジオの中に吉良がいるという設定で、四十七士が1人ずつ自分はなんのだれべえであると名乗りを上げてスタジオに1人ずつ入って行こうと。結局、最後はスタジオの中は討ち入りの衣装を着て、刀の大小を身につけた47人の侍で、ぎゅうぎゅう詰めになる。もう一人もびくりとも身動きのできない状態になると。これが最終的な変な絵柄です。

「ヤンタン」のレギュラーは、当時、やしきたかじんさんと歌手の岩崎宏美さんでしたが、喋ろうにもマイクは四十七士のどよめきを拾うばかりでした。そのときのラジオの放送は、僕はテレビのサブにおりましたんで、ラジオの放送は聞いていませんけれども、後で聞くと、何がなんだか訳の分からない怒号が何分も延々と続いたと。異様な雰囲気にも包まれていたそうです。次の日に、「ヤンタン」の火曜日の担当のディレクターが私のところに来て、昨日はなんちゅうことをしてくれましたかと。テレビに無茶苦茶にされて、「ヤンタン」の放送は聴取率調査の日なのに、とんでもない内容になってしまったじゃないですかと。それで私はにこにここと笑って言いました。今の君の気持ちは分かるけれども、聴取率調査の結果が出たら、きっと君の考え方は変わると思うよと言いました。聴取率調査の日だから、ラ・テサイマルで協力して欲しいと言われたから協力した。サイマルの数分間は、

ラジオを聞いている人は何が起きているのか全く分からなかっただろう。しかし、聞いていた人たちはラジオを変えたり切ったりするかなど。あれは一体なんやったんやろうと思って、その後もずっと聞きつづけたと思う。テレビを見ていた人は画面は見ていますから、何が起こったかは全部知っている。その人たちはああ面白かったで、次のテレビを見るかも分かりませんが、若い頃「ヤンタン」を聞いていた人なら、あの後、ラジオのスタジオはどないなつたんやろうと思って、ダイヤルを合わせるのが一番自然やと思う。「ヤンタン」の放送は一部はぼろぼろになったかも分からないけれども、聴取率アップには貢献出来たと思う。もし前回より聴取率が下がっていたら、そのときは謝るとそんなことを言いました。結果は、その直後からの数分間はラジオとは思えないくらい強烈な数字を取りまして、トータルで見てラ・テサイマルは大成功で、聴取率調査のある度に「また今度も頼むわ」となって3年間ずっと続けました。そのときの火曜日のディレクターと後に話をしまして、僕も長くやっていたから、ラジオも非常に面白いけれどもテレビもああいうダイナミックな面白さがあると説得して、テレビに引っ張りました。それでテレビ制作でこの前、定年を終えました。てな具合で三つの主なコーナーについて説明しましたが、昭和57年10月にスタートした「突然ガバチョ！」はちょうど3年後、丸3年の9月いっぱい終了しました。放送回数は153回、平均視聴率は16.3%ということで20%以上も30回以上取っています。ちなみに最高24.5で、ゲストは横山ノックさんでした。以上が「突然ガバチョ！」についてです。

< 鶴瓶の一番記憶に残っている番組は「自遊空間えっくす」 >

「突然ガバチョ！」についての話がずいぶん長くなってしまいましたが、次の「自遊空間えっくす」についてはそんなに長くはありません。すぐに終わります。いわば「突然ガバチョ！」の付録みたいなものですから。

「自遊空間えっくす」は、時期的には「突然ガバチョ！」が終わってすぐ昭和60年の10月から始まって、12月いっぱいまで3か月で終わりました。打ち切りになりました。極端な低視聴率が原因です。編成からはもうええやろうという感じと言われたんで、もう十分ですわ、もうよろしいわという感じで終わりにになりました。今から何年前になりますかね、ひょっとしたら10年ぐらいもう経っているかもしれません。鶴瓶さんが、多分、雑誌のインタビューだったと思うんですが、今まで数多くやってきたテレビ番組の中でどの番組が一番記憶に残っていますかという質問に対して、「自遊空間えっくす」だと言っているんですね。聞いた方はなんのこっちゃ分からなかったと思うんです。3か月だけちょろっとやっただけの番組ですから。彼の出した番組の中では一番変な番組だった。自分がやりたい番組だったから、そう答えたんだと思います。普通じゃないことをやる、変なことをやるという

のが彼の大きな特徴の一つですから。傍からあれこれ言われずに、自由に実験させてもらったという意味では、確かに記憶に残る番組だったと言えるでしょう。MBS という会社的には、「突然ガバチョ！」を3年間やったことへのご褒美という色合いが強くて、何でも好きなことをやったらという軽いノリで頼まれて、放送はたぶん金曜日の夜、もうちょっと遅い時間でしたね。12時20分か30分から、1時間半番組だったと思います。

「突然ガバチョ！」のボーナス代わりにもらった放送枠ではありますが、鶴瓶さんと私の間では一応コンセプトは作ってありました。テーマは「どういう形式を取ったらフリーなトークは可能なのか」ということでした。テレビでの司会者とゲストとの不自然な設定については「つるベタクシー」のところで言いましたが、そうかといってラジオでは本当に自由な喋りはできるのかなど。今はどういシステムになっているか知りませんが、当時のラジオは15秒か多分20秒ですね、20秒無言だと放送事故になるとそう言われていました。僕なんかそんなこと考えたことなかったんですが、出演者は20秒黙っていたらそれが大きな事故になるっていうのが、大きなかせになっていたみたいなんです。ラジオでは喋り続けなければならないという強迫観念がどこかにあると。それは喋る自由は無いんちゃうかという鶴瓶さん独特の考え方で。とりあえずの結論は、黙っている自由がある、喋りたくなかったら1分でも2分でも黙っていても事故にはならないテレビの方が、やっぱり自由の可能性があるのかなというアホなことを考えて、そういう考えのもとに組み立てたのが「自遊空間えっくす」という番組なんです。

#### <「音」と「絵」がバラバラ 奇抜な演出に視聴者から“テレビ壊れた”>

その構造はどういう構造かという、全然複雑じゃなくて、基本は画と音が違うということです。基本は笑福亭鶴瓶と清水国明、これは、あのねのねの片割れですけども、二人は京都産業大学の清水国明が1年先輩、鶴瓶が後輩という二人の喋りで、ただし一切画面には登場しない。画面を構成する要素はいくつかありまして、一つは二人が喋っている同じスタジオの中にもう一人入ってまして、それがイラストレーターの成瀬國晴さん。が、イラストを描くんですね。詳しいのは忘れちゃったけれども、多分、二人の表情を描いていたのか、二人の言っている内容については描いていなかったと思うんですけども、それがイラストを描いているのが途中経過も含めて見えるようなそういうイラストですね。

それから二つ目は、当時ニューメディアのはしりと言われていましたキャプテンシステムっていうのがあって、いろいろな映像を流していました。ニュースもいろいろな項目があって、そこをクリックするとニュースの内容が出るという。それから天気予報とか文字情報とか、自然の景色のビデオとか。それらは全部出演者の話

す内容とは全くリンクせず、画と音がばらばらの状態で放送されたので、視聴者からはうちのテレビが壊れたという電話が多数寄せられたと聞きました。ただ当時はあんまりクレームも出ず、「壊れた」と言われたら、「そういう番組なんです」。「壊れていません」と言うと、すっと引き下がっていただけだったので、こちらまで累が及びませんでしたけど。

画と音がばらばらで、表現していることが異なるというのはどんな理屈を付けようか、見にくい聞きにくいものなんです。ただ長さが3分とか5分の長さで、緊密に音も画も構成されたものなら、違和感はあるけれど、作品としては成立するかなと思います。「自遊空間えっくす」の場合は、自由に喋れるかどうかというのが実験の核だったわけですから。1時間半も喋り続けているので、ちゃんとした番組でありようがないというか。無責任なことを言うと怒られそうですが、こんな見辛い、見るのに努力がいる番組を見ていた人が、当時、1.5%とか2%もいたかと今更ながらびっくりしております。1.5、2は視聴率のことです。もちろん喋っていたのが鶴瓶さんと国明さんという、非常に座談のうまさには定評のある二人だったので、ラジオの音声として聞くと大変面白くて、テレビとして初めてキャプテンシステムの映像を長時間流した番組だと思います。ニューメディアとか新しもん好きの人には興味深い番組だったものの、見ていて大変お疲れになったのではないかと、遅ればせながらお詫びを申し上げる次第でございます。

正直に言いますと、今さらなんですけど、この番組について一つ大きな反省をしております。いろいろな新しいことを実験して、手法として面白かったんですが、肝心のトークの仕掛けが平凡だったなという反省です。二人の話が十分に面白いので、それに甘えて、ただ単に音声として面白いトークをするということに留まってしまってますね。「突然ガバチョ！」からのもう一つのテーマ、なんか過激なこと、なんか超刺激的なことをテーマにすべきではなかったのかなと。そこが3年間やって、疲れててほっとしたのかどうか分かりませんが、そこは抜かったかなという風に思っております。話が少しずれますが、最近読んだ本の中で、広島ローカル局が作っている番組のことを知りました。それは、「アグレッシブですけど、何か」と変なタイトルなんです。もう7年も続いていて、全国の10局以上のローカル局で流れています。関西地方はありません。司会が広島のご当地タレントで、有名なタレントとかは全く出ない。しかし視聴率は東京から流れてくるSMAPの中居君の番組を押さえて、同時間帯でトップという話なんです。見たことがないので詳細は分かりませんが、内容がアグレッシブで過激なんです。それで僕が「自遊空間えっくす」との関連で感心したのは、話が過激になった瞬間、カメラは出演者を無視してロケ地の絶景にパンすると。つまり音声だけは危ないトークを録りつつですね、美しい映像を流すという方法ですね。だから視聴者からしたらおいおいとい

う、危ないときになったら「えー、逃げるんかい」みたいなツッコミを待っているという、ちょっと新しい方法で。だから画と音の内容が違うということに、はっきり意味を持たせましたよね。だからそういう意味ではいっぺん見てみたいなどと最近思っております。そんなわけで「自遊空間えっくす」は29年前に3か月の寿命を終えました。

<「夜はクネクネ」スタートまもなく10% 「段取り」排し「リアルさ」追求>

「突然ガバチョ！」が始まったのが1982 昭和57年10月です。兄弟番組のように言われている「夜はクネクネ」が始まったのが、その3か月後の昭和58年の1月です。ほとんど同時期です。「夜はクネクネ」は4年続きましたので、「突ガバ！」よりちょっと長いですが、二つの番組が兄弟番組のように言われているのは制作スタッフが同じグループだったからなんですね。親分が大北禎昭さんという超厳しいプロデューサーで、ディレクターが私を含めて3人おりました。担当番組は「突然ガバチョ!」「夜はクネクネ」、そして毎週のようにあるTBSの「ザ・ベストテン」の中継ですね、むちゃな中継。この3本でした。同じグループにいましたから、「夜はクネクネ」につきましては番組の成立の事情についてもよく知っていますし、企画も一緒に考えました。原田伸郎さんとMBSのアナウンサーの角淳一さんが大阪の夜の街をただひたすら歩き回って、人々との偶然の出会いを淡々と描く、ひと言で言えばそういう乱暴な企画でした。

いちいちお年寄りにですね、企画意図を詳しく説明するのも面倒くさいので、ほっておきまして、パイロット版を見せましたらですね、制作のお年寄りのエライさんにもものすごく怒られました。そんなものは番組でも何でもないと。世の中に受け入れられるわけがないと。もしこの番組がヒットしたら、俺は即この会社を辞めるとまで言い切りました。1月にスタートした番組は、1か月か2か月も経たないぐらいで大ヒットしました。深夜の11時半頃からの1時間の放送でしたが、10%をしばしば超える、当時でいうとお化け番組になりました。

その激怒した制作のお年寄りのエライさんは、もちろん会社を辞めることなく、知らん顔で定年まで勤め上げられました。でも、その方の「そんなもんが世の中に受け入れられるわけがない」という発言が、私の頭と心に強く残って励みになりました。今から思うとよく言ってくれたという風に思っております。何のことはない。当時しゃかりきになって、私たちのグループが意地になって反抗していたのは、まさに「そんなものが世の中に受け入れられるわけがない」と、いう発想で世の中に媚びて、テレビとはこんなもんやとありきたりな番組を作っている人たちだったんですね。そこのところが「そんなものが世の中に受け入れられるわけがない」という一人の方の発言に集約されていたのかなという風に思っております。

「夜はクネクネ」は確かにおっさん二人が、うろうろしながら、老若男女と偶然の出会いを時系列的にありのまま追っかける番組でしたが、よく見ていただければ、それまでのロケ番組とは決定的に違うところがお分かりになると思うんです。それはテレビという強者の立場に安住しないところです。言葉で言うところちょっと強いですが、テレビの番組をロケで収録すると、その段取りが何より優先されていた時代があって、当時もそうでしたが、カメラとライトがあれば、向かうところ敵なしというか。もう、そこどけそこどけという感じでほとんどの人がテレビの段取りに合わせてくれたわけですね。でも、そんなことばかりやっていると、テレビのプロデューサーとかディレクターは傲慢で何でも出来るという風に勘違いしてしまいますよね。

現に私がラジオからテレビに異動したときは、なんと思い上がった人が多いのかとびっくりしました。テレビの力と自分の力を混同している人がずいぶん多かったです。だから「夜はクネクネ」では、最初の礼儀として、そういうテレビの段取りというのを優先しない、聞く人に合わせるというのを取ったわけです。

だから「夜はクネクネ」は段取り良く・・・段取り良くってというのはテレビの段取りということですからけれども。段取り良く片づけるということに待ったをかけた、多分、最初の番組じゃないかなと思います。段取り良くという美名のもとに、多くのリアルが失われているのではないかという風に思ったんです。段取り良くやるということは、準備していた通り、作り手の頭の中にあらかじめある番組の最終形に近づけるということが終わってしまう。ドラマならもちろんそれでいいんですが、ドキュメンタリーとかバラエティーは制作者があらかじめ持っている固定観念が、リアルな現実によって心地良く裏切られていくと。それが醍醐味のはずなんです。段取りに慣れた人は上澄みの現象をすくうことで満足してしまう。理屈で言うとそういうことになります。

ですから「夜はクネクネ」はできるだけ段取りを排除しました。だから、したり顔の業界人みたいな態度はとらない。面倒臭いことばかりやっていました。例えば、声をかけた女の子が「今から友達と映画見るねん」と言えば、映画が終わって、彼女が出て来るまで出演者とスタッフは待っていました。「どっか行きたいところある」と聞いて、「どこそこの公園行きたい」と言えば、車で30分のところなら30分のところまで、遠くでも出かけて行きました。そのおかげでロケの時間はめっちゃ長くなりましたが、そういう素人の出演者に寄り添うことでリアルがすくい取られたんじゃないかなという風に思っています。

その代わり犠牲者も出まして、カメラ2台で収録していたんですが、1台は伸郎さんと角さんが歩いているとき真正面から撮っていました。真正面から撮っていたということはずっと後ろ向きで歩いていたわけですね。それも今よりもずっと重

いカメラですから、7キロ8キロ、もっとあったかもしれません。このカメラマンは立派な体格をした、頑丈な人だったんですが、1日に7時間以上後ろ向きで歩くという無理を重ねたために、気の毒に腰を痛めてしまいました。そういう犠牲者が出て、カメラマンが代わると、また同じことをやりました。それから段取り良くスマートに物事が進行すればいいんですが、現実のいろんな局面においては、そうはいかないんです。テレビにおいても同じことで、現実のリアルを損なわないように「夜はクネクネ」という番組は街を歩く人たちの等身大のリアルといいですか、現実と誠実に向き合っていくと。そういう意味では女の子を引っ掛けて歩くというナンパな番組ではありますが、内容は現実を素直に反映したストレートなドキュメンタリー番組だったんじゃないかなという風に思っております。

「突然ガバチョ！」も、そういう意味ではドキュメンタリー番組と言える要素も多少ありまして、それは「突然親子」というコーナーがあって、鶴瓶さんがお母さんに扮してスタジオに遊びに来た素人のお客さんの中から、アットランダムに選んだ一人が子ども役になってお茶の間という設定で、お母さんと子どもが、お父さんを長江健次君がやっていて、アドリブの会話をするというような内容なんです。設定からして鶴瓶さんが女装してお母さん役になっているという、ありえない嘘の設定なんですけれども。見ている方はそういう嘘の設定に安心して、だらっと見ていると、あるところでいきなり超リアルな話が展開して、ある種のショックを受けるという構造にしたわけなんです。私は「突然ガバチョ！」ではそういうことを目指していたわけです。番組を見ている若い人たちにある種、ショックを与えようと。上から目線でお説教するんじゃなくて、大笑いさせた後、笑った後、何かを認識していると。何か、「ああ、なるほどな」と分かったらいいなと。そういう構造を目指しておりました。どれほど実現したかどうかは分かりませんが、意図としてはそういうのを目指しておりました。その意味では「突然ガバチョ！」も「夜はクネクネ」も手法はかなり違いますが、当時の番組作りから言うと、主流じゃない邪道のドキュメンタリーであるという点でも、兄弟番組と言ってもいいんじゃないかなという風に思っております。

フジテレビの「笑っていいとも！」が今年（2014年）の3月末で終わりました。31年半という長い歴史を刻みましたが、実はスタートしたのは、「突然ガバチョ！」と同じ年。同じ年も同じ年、1日前なんです。ベルト番組ですから月曜日から始まります。「突然ガバチョ！」は火曜日ですから昭和57年の10月5日なんです。 「笑っていいとも！」は昭和57年の10月4日なんです。大長寿番組と3年で終わった番組を比べるというのもちょっと乱暴な話なんです。共通点も結構あります。一つは今お話ししていたドキュメンタリーの要素です。時間が足りないので、

はしよりますが、タモリさんは番組のスタートの当初から、無理に面白くしようとは全然思っていないで、あるがままの自然体で淡々と進行をこなす。面白くしようとしやかりきになって頑張っているのは、売りたいという準レギュラーの人たちで、それにタモリさんは立ち会っているだけと。そこに妙な作為はないので、若い芸人あるいはゲストのドキュメンタリーになっている。テレフォンショッキングというのは、いろいろ仕込みがあると言われていますが、内容はほんとストレートそのもので、ドキュメンタリーの部分がありました。

エピソードを一つ紹介しますと、昭和 60 年 9 月に「突然ガバチョ！」は終わりますが、そのすぐ後、10 月から、久米宏さんの「ニュースステーション」（テレビ朝日系）が始まるんですね。これも非常に象徴的な、そういう時代だったんですね。やっぱりニュースを夜の 10 時からベルトでやるという。

「突然ガバチョ！」が 9 月いっぱい終わることが決まって、10 月から「ニュースステーション」が始まるというのが分かったときに、鶴瓶さんは私に、こそっと言いました。久米さんの「ニュースステーション」と、裏表になるので、「ニュースステーション」と勝負したかったですねと。それを聞いたときに、そのときは単純にそうねと。ニュース番組の裏でバラエティーやったら、どのぐらい数字が取れたかなと思っただけでした。でも、後になって考えると、鶴瓶さん自身もそのとき意識する、しないにかかわらず、自分のやっている番組が若い人たちのニュースであり、ドキュメンタリーであると思っていたのではないかなと。これは僕の勝手な憶測かもしれませんが、ふと感じました。

そういうニュースとか、ドキュメンタリーがゴールデンのど真ん中に来るような時代、だからテレビの嘘とかも、だいたいばれて来つつある時代で、そういう時代の感覚というのを大いに意識した時代でありました。

#### <1980 年代のテレビ界 番組の中軸に既成勢力より新勢力を発掘>

それから、もう一つその時代の大きな特徴があったと思います。それは既存の大タレントに頼らない、新しいやつを使おうという大きな流れです。

現在のテレビ界は超保守的における超保守的なタレントの起用状況と比較すれば、もの凄い差があります。私が「突然ガバチョ！」で鶴瓶さんを起用したとき、鶴瓶さんは 30 歳。ラジオではかなり名前は通っていましたが、テレビのレギュラーはほとんどなし。ローカル放送とはいえ火曜 22 時のプライムタイムですから、そこに登場できたのは、MBS のやけくそのネットワーク状況があったから。

タモリさんは「いいとも！」が始まったとき、年こそたぶん 36、37 ですけども、黒いサングラスをかけて、芸の種類も、昼間の主婦相手に通用するようなものではなかった。要するにメジャーなタレントではなかった。四か国語麻雀とか、ハナモ

ゲラ語とかそういうのをやっていた時期ですから。だからフジテレビの横澤彪さんが昼の12時台のベルトでタモリさんを起用すると聞いてびっくりしました。

「笑っていいとも！」の1年前に始まったのが「オレたちひょうきん族」という番組ですが、これにしたって、ビートたけしさんも当時33、34歳。そんなに大タレントじゃない。売れっ子じゃなかった。

さんま、紳助というのは25、26歳の若造でした。つまりアウトロー的な人を起用するのが流行っていた時代という風に言えると思います。

だから当時、誰も褒めたことのないやつを褒める、つまり既成勢力ではなくて、新勢力を使って制作者独自の新しい色を出すと。そういう人が出始めた時代、そういう時代だったんですね。

私が「突然ガバチョ！」で鶴瓶さんを使ったのも、何年後かの「4時ですよーだ」でダウンタウンを使ったのも、全くそれと同じ理屈でした。

大タレントはギャラも高いですしね。気を遣って番組作らないとだめですし、そんな面倒臭いことやってられないと。それより誰も褒めていない人を褒めて世間に認めさせる方が面白いと。こういう風に思っていました。

タモリ、たけし、さんまという3人がビッグスリーと言われるようになったのが1985年頃、昭和60年頃。もうちょっと後かなとも思いますが、一般的にはそう言われていますから。

それでももう30年近いですね。この30年にビッグになったお笑いタレントが何人いるかという、そうはいないですね。とんねるずとかウッチャンナンチャン、ダウンタウンあとは小者ばかりです。上がつかえていて流動性のない世界になっていると。だからそんな世界から、度肝を抜くようなダイナミックな新しい世界が生まれてくるはずがなく、ちょっと寂しいなと思います。

1987年、昭和62年の4月に「4時ですよーだ」がスタートして、7月の夏休みに入る頃には関西では大ブレイクしてしまして。徐々に東京で、「大阪にはダウンタウンっていうすごいやつがいる」という話が秋ぐらいには伝わっていくんです。まだ大阪でも火がつきかけていた時期、5月ぐらいの段階でもうすでに「4時ですよーだ」とか、ダウンタウンに注目していたのが、今言いました「ひょうきん族」「いいとも！」のプロデューサーの横澤彪さんでした。

彼は大阪に来て、「4時ですよーだ」の生放送も見にきています。そのとき私もお会いしました。凄い大物のプロデューサーが、わざわざローカルの夕方生放送を見に来たのかと感心しましたが、彼にしてみれば、面白いという評判を聞きつけると、すぐ現場に飛んで行くと。それが当たり前のことだったんでしょうね。新しい、新鮮な人をどんどん発掘してスターにしようという、そんな世の中全体が右肩上がりの時代だったと思います。その辺が、今の時代と決定的に違うところです。

< 「4時ですよーだ」に若手芸人 ダウンタウン起用 >

最後に「4時ですよーだ」についてお話します。この番組の成立につきましては、私の立場は「突然ガバチョ！」とは違って全く受け身です。事情をお話しますと、まずは吉本興業サイドから毎日放送の編成か、制作か分かりませんが、局長クラスに依頼があって、その後、制作の現場に下りてきた話です。いわば政治的な色合いを持った話ですね。吉本興業は2丁目劇場というのが当時心斎橋にあって、それを活性化しなかった。そのためには2丁目劇場の若手のトップであるダウンタウンを売り出したかった。そしてダウンタウン以下何十組もいる若手芸人のホームグラウンドを確立しなかったと。だから吉本興業と毎日放送という会社同士の戦略物件だったわけなんです。ですからはっきり言えば、担当のプロデューサーは誰でもよかった。私は「突然ガバチョ！」が終わって、いろいろな番組をやっている、はたから見るとのんきにぶらぶらしているように見えたんですかね。目を付けられまして、やる気があるのかどうか打診がありました。

夕方の1時間の月～金ベルト番組、MC(司会)はダウンタウン、金はない、たぶんそういう風に言われたんだと思います。私は即やりますと答えました。

なぜかというMBSのラジオの深夜番組で、ダウンタウンの喋りの才能を知っていたからです。ダウンタウンで新番組をやってくれないかと打診があった数か月前の、確か木曜日の深夜2時半、非常に遅い時間に、当時スタジオのあった千里丘の放送センターから車で自宅に帰ろうとしていたとき、MBSのラジオから、聞きなれない男二人組の喋りが流れてきたんですね。あるアダルトビデオをめぐる二人のやり取りが、喋りの間が非常に面白い。すごい才能を感じて、何というやつらかなと非常に興味を持ちましたが、全然名乗らないんですね。とくに家の駐車場に着いているんですが、まだ誰か分からないから車を止めてじっと待っていました。番組の最後には名乗るだろうと、15分ぐらい待ってやっとエンディングが来たんです。エンディングテーマが流れて「今夜のお相手は～」と普通なら名乗るんですが、こいつらはなんと「今夜のお相手は浮世亭三吾十吾でした」と。当時、浮世亭三吾十吾さんというタレントさんはいらっしゃいましたが、嘘の他のコンビの名前を言って終わったんですね。「くそー。こいつらせっかく待ったのに」というむかつく気持ちも多少ありましたけれども、何かこいつら面白そうだなという予感の方が大きかったです。次の日に、そのラジオの番組の担当に聞いた名前がダウンタウンです。こういういきさつがあったので、MCはダウンタウンでやって欲しいと聞いた途端、即やりましょうと答えたわけです。

放送時間は夕方4時から5時の1時間でやって欲しいと言われました。私の希望

は5時から6時の1時間でした。なぜかと言うと、1時間違うだけで、見ている人の絶対数が全然違うんですね。特にターゲットである中学生高校生が4時台には家にほとんどいないんですよ。調べてみますと、当時公立高校、府立高校、県立高校含めて終業時間が3時5分ぐらい、ですから授業が終わって、すっ飛んで帰宅しても、ぎりぎり間に合うかどうかという、見てもらおうという人が非常に短い時間帯である。話し合いを何度かしましたが、結局4時からになりました。理由は単純で、5時台というのは次の6時からのニュース枠をはさんで、ゴールデンタイムにつながる時間帯で、そこには高視聴率でつながないとだめ。高視聴率で、その5時台の1時間で、スポットでがっばり儲けないとだめと。そういう重要なスポットの収容枠だったわけですね。ですから、何より高い視聴率が要求されると。それでたまたま当時の5時台はですね、ものすごく強いドラマのリピート枠になっておりました。そのドラマの代表選手が「男女7人夏物語」、さんま、大竹しのぶの例のシリーズですね。それから他、「秋物語」とか「冬物語」とかありましたけれども、TBSのドラマが絶好調の時代でリピートとはいえ平気で10%は取っていました。「君、5時台で10%取れる自信があるか」と言われても、不利な条件ばかりで、金もないって言われていますね。そんな計算立ちません。じゃあしょうがないです、4時台でやりますと言いました。ところが4時台にもめっちゃ強いリピート番組があって、それがABCの「暴れん坊将軍」です。いつも10%取っていて、下手すると14、15%取る番組で、「あらあら、しまったな」と思いましたが、もう遅いと。まあ「突然ガバチョ！」のときと同じ状況です。半ばやけくそでしたけど、そういう枠だからこそ、実は外からのプレッシャーがないので、制作者としては大喜びという状況で作業がスタートいたしました。

吉本興業サイドのプロデューサーは、現社長の大崎洋氏で、当時NSCというタレント養成学校の担当でした。そのNSCの1期生のダウンタウンを非常にかわいがっていた人で、ダウンタウンの育ての親と言われている人です。大崎氏といつどういいう話をしたのか覚えていないんですが、番組が始まるよりかなり早い時期にこういう話を彼から聞いていました。ダウンタウンを一気にブレイクさせたいんだと。そして東京に進出させたい。そんなに先の話ではなくて、2年か3年か先の話ですと。もちろんそれは大崎氏の一存ではなくて、吉本の幹部の考え方でもあったと思います。もちろん快諾しました。面白いなと思いました。「突然ガバチョ！」が終わって1年半経っていましたが、そろそろ何かやろうかと、うずうずしていた頃だったんで。番組を一生懸命やって失敗したら終わるだけなんですけど、成功しても、2年か3年というのが気に入らして。そんなのが好きなんですね、結局。だからいわば気分としては高校の先生みたいな気分で、関西ローカルという名前の高校にいる間にですね、タレントの才能の可能性を最大限に引っ張り出して、全国ネット

トという名前の東京のすごい大学に行かせると。完全に高校教師のそういう立場になっていました。

だから考えてみれば、鶴瓶さんの場合はそこまで売れると、絶対どうしても売ってやろうと松竹芸能は考えていたかどうか分かりませんが、結局「突然ガバチョ！」で一世を風靡した彼は1年後に東京キー局の全国ネット2本やるわけですね。2本をメインでやるビッグタレントになっていました。

下世話な話なんですけれども、非常に分かりやすいので話しますと、「突然ガバチョ！」がスタートしたときの鶴瓶さんのギャラは1本7万7千円。3年で多少倍ぐらいにはなったかと思うんですが、1年後に東京ネットの司会では10倍を超えたと聞きました。ギャラの差はだいたいそのぐらいありましたね。売れたら東京に行くというのは、もちろん大きい広いところで皆に多く見てもらえるという、タレントとしてのアレもありますけれども、経済原理も当たり前のことでしたね。いきなり10倍になるわけですから。だから、昔の野茂やイチロー、最近のマー君とか大リーグ行くのと同じようにですね、多くのタレントさんが東京に移っていったわけです。

#### <「2丁目劇場」の雰囲気そのまま茶の間へ 主婦層にアピール>

話は戻りまして、2年後か3年後にはダウンタウンを東京に進出させたいという吉本側の願いが片一方にあって。一方、F1、M1など若い層にフィットする番組を作って、スポットを大量に獲得したいというMBS側の願いがもう片方にあって、どちらにしても私としては対象の年齢層があまりいない、不利な4時台という戦場に突撃せざるを得なかったというのが現状であります。ダウンタウンは当時、テレビには出ていませんでした。主な活動の場である心齋橋筋二丁目劇場、ここが「4時ですよーだ」の舞台にもなるわけなんですけど、ここは土曜日とか日曜日にはイベントをやっていて、その二丁目劇場では一部の女子中学生、女子高生を中心に、もの凄いいカリスマ的な人気がありました。しかし一般にはほとんど知られていないという、そういう極端な状況でした。彼らを夕方4時にテレビを一番たくさん見ている主婦層、ここにどうアピールするか。これをしないことには中高生だけだと。ターゲットは中高生なんですけど、主婦層にもある程度見てもらわないと視聴率を取ることができませんから、どういう作戦で行こうかなと。作戦を考えたというほどでもない単純な作戦でした。それはありのままのダウンタウンを見せること、要するに二丁目劇場のイベントで「ワー！」「キャー！」と無茶苦茶、騒がれているダウンタウンをそのままテレビで見せることだったんですね。だからテレビ的に作り替えるとか、主婦に合わせて見やすくするとかそういう細工は一切しませんでした。ですから「4時ですよーだ」が始まりますと、テーマが流れて5秒後ぐらいかな、ダウンタウンが後ろのドアから飛び出してくるんですけども、ほっといた

ら5分10分でも「ワー！」「キャー！」やっていたでしょうね。ただ5分10分つてなるとさすがに無理なんで、2、3分ぐらいはキャーキャー言わせていたと思います、無理に。普通、テレビは、ADとかフロアが黙れとかいう感じで、20秒30秒で止めて、分かった、分かったと言って本論に入る。それが見やすいテレビということだったんですが、「4時ですよーだ」では一切細工しませんでした。主婦の目には、今まで見たこともないチンピラみたいな男二人が、女子中高生にキャーキャー言われて收拾がつかない状況を何分か見せると、「この人ら誰？」と。これ、もうそしか武器がなかったわけですね。そういう情報を主婦、もちろんF1、F2という年齢層ですけれども、どう受け取るのか非常に興味がありました。

それで昭和62年の4月に「4時ですよーだ」が始まって、最初は3%、4%というところから始まったんですけれども、思ったより視聴者の食いつきは早かったです。5月では6%、6月は7%、7月の夏休みが近付くともう10%ぐらいになりました。うなぎ上りで、夏休みには野外の広場で4000人集めて特番までやれるという状況になりました。トントン拍子というのは、ああいうことをいうんですかね。あれよあれよという間にダウンタウンは関西を制覇したということです。

成功の原因というのはもちろん10あるとしたら、1から9まではダウンタウンの圧倒的な才能というのが一番の要素だったんですが。彼らの才能のファンで、既成の型にはめずにのびのびとやらせる若い制作スタッフ、そういう体制だったことだと思っています。プロデューサーの私が38歳でスタッフの最年長でした。大崎氏が33歳、ダウンタウンが23歳、ディレクターは20代半ばから30代にかけてという感じでした。“船頭多くして船山に上る”という諺がありますが、あのときは極めて船頭が少なかったと。僕がオッケー出して、大崎氏がオッケー出すともう全部すぐ通ったわけです。二人を説得すればよかったわけですから。そういう非常にシンプルな形だったわけです。当時の私の上司は、50歳過ぎて多くの実績を持って、番組にいちいち口を出すタイプだったんですが、この番組に関しては全くノータッチでした。そのとき言われたのが、年が離れているのでダウンタウンのどこが面白いのか正直行ってさっぱり分からんと。もう全部君に任せるということでした。私はダウンタウンとは15歳違いで、全部とは言いませんが、7~8割は理解しているつもりでしたから、よしよしそれじゃあ自分の好きなようにやらせてもらおうと思いました。上司にそういう風に言われて、自分1人の考えで番組をやるのが好きだったんですね。上から横からぐずぐず言われると一気にやる気をなくすタイプで、非常に我儘な人間で、ディレクターとかプロデューサーとかいう、ある意味で我儘ということが大きな武器になる職種がなかったら、四十何年間もサラリーマンをやっていなかったかなと最近つくづく思っております。

「突然ガバチョ！」のときも実はそうで、私はディレクターでしたが、先ほども言いましたプロデューサーの大北さんという方が大変親分肌の人で、番組はお前の好きなように自由にやれと。それを邪魔する世俗的なことは俺が全部ブロックしてやると、こう言ってくれました。そのおかげでその当時は、普通担当番組という3本4本5本あるのが普通というときに、僕は「突然ガバチョ！」1本に専念することができた。ただその1本のために毎週2日ほど徹夜していましたが、ライン部長からは、お前はホンマに効率の悪い仕事ばかりしてと、いつも顔合わせるたびに吐き捨てるように言われておりました。今と比べればもの凄くのんびりした時代なのに、そんな時代ですら、ガードしてくれる親分がいなければ、船頭がめっちゃ多ければですね、うだうだ言わずほっておいてくれる環境がなければ、新しいものを作るというのは難しいことだったのかなと思っております。他局のことは存じあげませんが、たぶん同じ状況があったんじゃないかなと思います。

「4時ですよーだ」に戻りますと、番組の内容というのは本当に幼稚なものです。毎日1時間の生放送で、かける5ですから5時間やるわけですから、凝ったことは何もできません。ダウンタウンのキャラクターを全面に押し出すことと、彼らに続く今田、東野とか若手十数組の勢いを表現すること、それぐらいしか売り物はありませんでした。制作スタッフは何十人かいましたけれども、不思議なほどに皆、ダウンタウンが好きで、いわばダウンタウンというロケットを、なるべく高く打ち上げようという共通のどっかい目標というのがあるって、そういう意志が感じられました。「4時ですよーだ」がスタートして、「4時ですよーだ」そのものは2年、ダウンタウンが出てたのが2年、途中から今田、東野に代わって都合2年半しか続きませんでした。3年後予定通りダウンタウンは東京進出を果たしました。そして東京進出したのは、ダウンタウンだけではありませんでした。「4時ですよーだ」の若い制作スタッフ、これは毎日放送のスタッフはごく一部でして、ほとんどは制作プロダクションの人だったんです。若い制作スタッフの内、十数人はダウンタウンを頼りにという怒られますけれども、ダウンタウンを實際上、頼りに仕事の場を東京に移しました。業界の人間はこの現象をダウンタウンポートピープルと面白がって揶揄していいました。才能と意欲のある若い才能たちは、数年間は東京で貧乏暮らしをして生き延びました。今では、社長になって自分の会社を立ち上げている者も数人おります。ある意味、関西からの頭脳集団流出を助けたんかという言い方も出来ますが、ダウンタウンとともに成長した彼らを、食わせるだけのキャパシティが残念ながら大阪にはなかったとも言えるので、半分は責任を感じております。ここまで時計も見ずにやっけてしまっていて、1時間というお話だったのがとりとめもない雑談で1時間半にもなってしまいました。あと現在の地上波、あるいは10年後という話は、たぶん同じ状況があったんじゃないかなと思います。

とで。喉が枯れていてお聞き苦しかったでしょうが、以上で報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会者 面白いですねえ。私は、制作の現場を全く知らないまま、テレビ局生活を終わってしまいましたので、こういうお話を伺うと、いろいろなところに「なるほど」がたくさんあったような気がします。さあ、皆さん方の中で、お聞きになりたいこと、それからご意見などがありましたらどうぞ。

—— さっき話されたタクシーのは。今、テレビ東京、テレビ大阪系でやっていますわ。

田中氏 そうですか。一時、宮根さんの番組でも。

—— 月曜日の夜に、例の神経病んだ女の子の二人のコンビの・・・

田中氏 はい、松嶋ですね。鶴瓶とやっている？ 鶴瓶がやっているんですか。自分で。

—— 鶴瓶と二人で女の子がやっている、実にバカバカしいトーク番組なんだけど。バカというかなんというか。そのコーナーの後ろで、まさしく鶴瓶がタクシーの運転手で。

田中氏 やっていますか！？あいつ（笑）

—— 後ろにはタレントが乗っている。今、そのお話を聞いて、それをそのまま今やっているなど。

—— ここに原点があったと。

田中 それは知りませんでした。

—— 多分、鶴瓶さんが、今番組全部、噛んでいると思います。テレビ大阪、月曜日の12時10分くらいから。夜、深夜。私はテレビばかり見ているからね。ちょっとこの中の方は、ほとんどテレビ見ない方も多いんですが、私はもって生まれたテレビ人間で。非常に悔しいのは、私は昭和57年に熊本へ転勤だったんですよ。

田中氏 ああ。じゃあ、ご覧になっていない。

—— 20年間、熊本にいましたから。全部見ていない。今、「なるほどなあ」と思いながらお話を伺いました。ダウンタウンというのは、まさしく関西ですね。東京でウケてるけれども、東京感覚の人間からすりゃ、とにかくガラ悪いですよ。今もって、ガラ悪いというか、特に浜ちゃんの方。まだ、松本の方がいい。浜ちゃんというのは、実際の人間の本質は違うんだろけど、よくあれだけ徹底して、公私ともにというか。現実には違うんだろけども、ああいうタレントというのは今、少ないのかなあ。というのが、率直な感想です。

—— さっきの話で、4時台にダウンタウンを付けたという話がありました。それはどうなんでしょう。主婦層が彼らを理解したのでしょうか。それとも、主婦層が彼らに慣れたんでしょうかね。

田中氏 やはり、中高生にその時期、もの凄く人気があるということは、時代そのものともかなりリンクしているはずなんで。主婦でもいろいろな方がいらっしゃいますし、アンテナの感度がいい人は、その時代の何かを感じたんじゃないかと思うんです。でない、一時、数字で15%ぐらいまでいったことがありますけど、そんな数字にはならないですね。中高生だけだと、僕は5、6%止まりだったんじゃないかなという風に思いますね。

#### <テレビ現場の固定観念取り払う 制作のプロセス変える>

—— 今、話を聞いていましたら、テレビのいわゆるメカニズムとか、テレビの演出作法とか、そういうものを全く否定することから、始まっていますね。テレビの演出作法とか、メカニズムというのは、どういうものだと思いますか。先ほどの「段取り」という言葉で象徴されるもの。

田中氏 やっぱり機械に負けているというか。僕はそういうとらえ方でした。それとやっぱり、個人的な話で言いますと、昭和55年にテレビに行くんですけども。「突然ガバチョ！」が始まったのが57年で、僕47年入社ですから。まあ言ったら、ずっとテレビをやっている人もいるわけですね。そしたら僕の先輩だったら、僕がテレビに行ったときに、もう10年やっているわけですよ。ということは、あと10年、その人らも優秀な人でしたから、10年一生懸命、普通にやってもこれかというね。非常に失礼な言い方ですけど。それはちょっと違うやろと。だから卑怯な手を使ってでも、目立つ方法って考えますよね。だって10年後、自分が10年使っても、あそこまでしか行けないというのを分かっているわけですから。だから、いろいろな理屈を付けてというか、今あるものを否定しないと。だからはっきり言って、テレビやったときも、大北さんというプロデューサーがいましたが、いわば、ならず

者集団でしたからね。正規軍じゃ全然なかったですから。「お前らそれやっつけ」みたいな感じでしたから。でも、革命は辺境から生まれるわけで。一番恵まれない、一番当時の世の中の動きに否定的なところから、次の時代が生まれるわけで。そういう意味で、非常にちょっとしたことで、たいしたことと言うなと言われますが、僕はそれを意識してやっていましたね。無理矢理、無茶苦茶やっていましたし。かなり先輩で言うと、日テレにおられた細野さん。細野邦彦さんは、NHKの大河ドラマ、あれ1969年でした？「天と地と」というのがすごい人気のときに、それを潰すために、「裏番組をぶっとばせ！」という、野球拳をやって脱いでいくやつをやって、「天と地と」を抜くんですけど。ただ、そんな無茶苦茶やったので、1年で終わりました。彼が確かこう言っていました、要するに東京のおぼっちゃんで、いい子で作ってるやつには負けられないとか。田舎ものの迫力を見せてやる、みたいな。だから、そういう人がやると多少、下品になるんですよ。僕も「突然ガバチョ！」は上品な番組だと思っていませんし、「4時ですよーだ」も下品な番組なんです。ある種、何か大きく変えようと思うと、下品さがあるんですよ。すみません、お答えになっていませんけど。

——— それでね、もう一つね、お尋ねしたいのが、テレビのメカニズムとか、いわゆるテレビ的演出を否定しながらも、先ほどからのお話を聞いていると、テレビの特性を、十分意識しながら、番組を作られているという風に感じたんです。

田中氏 そうですね。ですから、具体的なことで言うと、テレビの段取りというのは、例えばスタジオの中で言いますと、バミルという、「立ち位置、ここね」ということで印を付けますよね。「このコーナーは立ち位置、ここ。ここ」と全部決められて、その場所にライトを当てるわけですね。今、どういう作り方しているのか、全体にワァーッと明るくしているのかしれませんが。ここにスポットライトとか、上から影が出んように当てる。だからそれは段取りなわけです。そこに立ってもらわないと困るわけですよ。だから、僕は技術の人にもお願いして、そういう固定観念を取っ払って欲しいと言いました。つまり、鶴瓶が、このコーナーはここに立って、次はここでとか決められたくないと。スタジオの中、どこでも行くと。セットの裏も行くと。ただ照明は、全部映さなくていいと。カメラも回れなかったらいいと。できるだけハンディカメラで回って欲しいけど。ただ音はついていってくれと。音が聞こえなかったら、何しているか分かりませんから。あと、照明当たっていないところでも、暗いところでもリアリティーはその方が出ますから。あらかじめ全部ライトが当たっているところだけで、物事を処理しようと思っても。どうか、そういうこだわりがありました。

——— それの最大の問題点は、「放送枠」という問題かもしれませんね。枠があるから、段取りがあって、今言われたようないろいろな約束事があって、もちろん機械と。機械の進化によって、テレビ番組が面白くなくなったということを行った人がいるんですが。

田中氏 それを使いこなすのに必死ですからね、皆。僕は何十年もディレクター業務はやっていませんが、今は編集も、編集マンじゃなくて、ディレクターがほとんどパソコンでやれるんですね。テロップも全部入れられるし。そんなことが出来るために、実際のディレクターの作業をせずに、そんな細かいことばかりやってるわけですよ。これは、クリエイティビティの磨滅というか、衰弱だと思いますね。

——— 例えば、「突然ガバチョ！」でね、私はこんな感じかなと思ったんですけど。出演者とテレビカメラの関係とといいますか、スタジオの中でペDESTAL（カメラ台）で移動するだけの関係を、もっと自由になりたいとかですね。どんどん動くカメラとか、じっとしていない映像と、じっとしていない喋りによる番組というのを常に考えておられたのかなあという。

田中氏 そうですね。現実的には、固定カメラ、大きなカメラが3台で、上から1台、小さいカメラで俯瞰で撮っていて、1台は持って回るカメラでしたから。5台しか使っていないんです。だから、今偉そうに言いましたけど、ほとんど7割か8割は中でやっているんですよ。ところが、そこから外れたときにも、必ず1台はカメラがついていく。そこも映す。当時はそれだけでも、新しかったんですよ。なるべく、そういうリアリティーを出そうと。要するに、正統派に横綱相撲して、よしかかってこいという立場じゃありませんでしたから。頭からぶつかっていくときに、ちょっと砂でも目にぶつけたるかみたいな感じでやっていましたから。そういう卑怯な番組でした。

——— 実は私は、さっきお話に出ました横澤彪さんと、彼がまだ制作会社にいた頃に仕事をすることがあります。どんな番組かといいますと、「全日本空手道選手権大会」というのを、そのプロダクションが、テレビ東京からフジテレビに移ったときに中継をやっておりました。それで、私は大阪で空手の中継をやっていましたものですから、系列の中で、空手の中継ができるアナウンサーをフジが探しておりまして、じゃあ来てくれと、3年行きましたかね。ただ、東京体育館に入ると、1回戦から全部試合を、喋られるんですよ。それを全部収録して。そこで面白い、凄いシーンを集めて、「予選」といって編集するんですね。（この試合は）寸止めじゃないので、骨が折れる人も出てきますし、本人は必死ですからね、戦っているんですよ。そう

いう映像を全部集めて、「予選」といって放送する。その次に、「準決勝」をやって「決勝」をやる。まあ、後半はちょっとまともになるんですが、そんな魅せるもの、それに徹するような人だったですね。毎晩、晩飯を食いながら話をしている中で、さっき、おっしゃっていたみたいに、あの方は、作られた笑いがものすごく嫌いだったんですね。関西の笑いが面白いのは、人間の本質的な面白さが、関西の笑いの中にあるんだというようなことを、常に言っておられたんですね。ですから、そのあたりというものが、土曜日の夜とか「いいとも」に反映されてきたのかなあという。だから、タレントがいて、面白くなったんじゃなくて、東京の笑いの質を変えていって、東京人も関西の笑いが分かるようになったといいますかね。やっぱり彼が何か仕掛けていたのではないかなあという気がしているんです。

田中氏 たしかに関西のそういう笑いというのは好きだったんでしょうね。だって、フジテレビを辞められて、吉本興業に入られましたからね。

——— そうそう。そうなんですよね。最初の頃の「ガバチョ！」の中で、鶴瓶のお客様第一主義ということで、スタジオのセットを客席と一体化する、出演者がいつでも客席に移動できる、お客様を空腹状態にしないために、集合してスタジオに入るまでの待ち時間、パンと牛乳、それからスタジオの中では特製たこ焼きを食べて録画の開始を待つ、というような裏話（「毎日放送の40年」）が出ていまして。なお、番組終了後、出演者は全員お客様に握手をして、バスに乗り込んで、帰るまでお見送りをしていたという、非常に面白い不思議な番組だったんですね。

田中氏 そこはもうサービス精神ですよ。スタジオは、お客さんが入って座るのはこういう椅子じゃなくて、スロープが付いた大学の芝生のキャンパスがちょっと傾斜しているというか。どこからも演者が見えるように、こうなっているところですね。すぐに出て来られますし、見えにくいこともないです。そういう意味では、面白いセットだったなど。

——— 空腹にさせておかないというのはどうしてですか。

田中氏 あのね、結構、時間かかるんですよ。100人ぐらいでしたかね、集めまして。集会場っていうところへ。当時千里の、千里放送センターの横にあった集会場というところへ全部入れて。ADが、「突然親子」というのに出る人を決めないとあきませんから、待たす間、客の空気を温めながら、面白いやつを探すわけですね。そこで1時間ぐらいあって、スタジオ入って、1時間番組ですが、1時間で終わりませんからね、当たり前ですけど。たくさん撮りますから。2時間は撮りますから。それ

でなんだかんだしていると、結構、時間がかかるんで、食べてもらったんですね。

—— 私、「鶴瓶の家族に乾杯」をずっと見ているんですが、今、田中さんのお話を聞いて、鶴瓶さんというのは、そのときの原点がそのままずっと生きているなというのを感じます。あの番組自体が、NHK なんだけど、ある意味、NHK らしからぬというか、中身が何にもないといえば何にもないんですよ。バカバカしいといえば、バカバカしいし。何をフラフラ歩いているんだみたいなところがあるんだけど。やっぱりあの人の人間的な温かさというか、基本的な真面目さというか、生真面目さというか、真摯に対象に向かう姿勢というのが、今、田中さんが「ガバチョ！」を作られたときに、語られたものが、そのまま今も持っておられるのじゃないかなということ、実は痛感させてもらったということです。ただそれだけのことなんです。今のテレビ番組には、そういうのがどこまであるか。報道番組であれ、娯楽番組であれ、テレビってそうあるべきだということ、何でもそうじゃないかなと。好きか嫌いかは年齢層によって、違いはあるんだけど、あの中に連綿と流れている原点というのは、大事にせにやいかんなどというのを感じながらいたんです。

田中氏 「家族に乾杯」で思い出しましたが、「家族に乾杯」もそうですし、テレビ東京でやってるいろんな番組もそうですし、地井武男さんとか、もう亡くなりましたけど。要するに、「夜はクネクネ」をベースにした番組ってもの凄く多いんですよ。実は鶴瓶に何度も言われたことがあるんですが、「夜はクネクネは、なぜ僕じゃなくて、伸郎なんですか」と。「一番得意やのに、なんでやらしてくれへんねん」て言うわけですよ。お前、ほかやっているやないかという話ですけど。もう自由自在ですから、あんなところになると。それで何やというとは別に何もないんですけど、雰囲気なんですけどね。「夜はクネクネ」の後継番組は多いですよ。

—— この時代は、たぶん、田中さんがおやりになりたいことが、かなりの手でおやりになれたんじゃないかなという気はします。ある意味では、いろいろなものを切り開くことのできる余地がまだあったんじゃないかと思うんです。今はどうなんでしょうね。何か切り開く余地がある時代なのか、大変、難しい時代なのか。

<1分刻みの視聴率にこだわる若い制作者 近視眼的な視聴率主義の弊害>

田中氏 難しいでしょうね。例えば、今、僕がやるとしたら、地上波のテレビでは自信ないですね。そしたら、ニコニコ動画で何やるとか、YouTube をどう使ってどうやるとか。そのレベルの切り口の内容やと思うんですね。つまり、テレビというのは、ニコニコ動画・YouTube の3分、4分の動画から、映画ぐらいの尺の大作までを相手にして、テレビは、それらに全部勝とうとしている

んですよ。それが無理なんですよ。3分、5分の動画、よく出来ています。コンテンツのクオリティーという部分ではね、まだこうやったら面白いなというのがありますけど。それを今の地上波でどうやるかと言われた場合に、なかなか難しい問題がありますね。それはお金を儲けないとだめだからです。

あの時代は、変わったことをやれば、そんなに、お金を儲けないと、と意識しないでも、時代全体がもうお金儲けてくれましたから。だからそういう意味では、今は、お金というところちょっとストレート過ぎますが、効率というのが、全てを判断する基準になっていますね。効率が神みたいになっていて、一つは放送時間の長時間化ですね。ドラマ以外の1時間のレギュラー番組と言うのは、瀕死の状態と僕は思っています。2時間特番を頻発するんですよ。それは、たすき掛け編成と言いまして、2時間番組を隔週テレコでやるわけですね。例えば、7時から9時まで2時間、番組をやるとすると、今週は7時からの番組を2時間やるねと。次の週は7時からの番組を止めて、8時からの番組を2時間やるねと。こういうたすき掛けの特番というのが多くて、これは新しい発想の特番じゃなくて、ありものの、ウケてる1時間を2時間に水増しするという発想なんですよ。これはなぜかと言うと、そっちの方がレーティングを取れるんですよ。なぜかと言うと、2時間は長いから、つけてたら安心感があるというか。それと、7時から9時だとしたら、8時またぎ、ここがミニ番組とか全部内包してしまいますから、そこを意識させないで見ると。チャンネルを変えるチャンスを与えない。そういう小細工で取っているわけです。だから、例えば、何曜日の何時、レギュラーという番組はもちろん今でもたくさんありますけど、成績の悪い、視聴率の悪い番組は必ず2週間にいっぺんですよ。特番、させられていますね。それは、視聴習慣がつくわけがないですよ。視聴習慣、何曜日の何時は何というのが、僕も言えないですもん、今。それはここ数年、特に酷いと思います。効率というので、一つがその番組の形式の効率化。それから、もう一つはタレントですね。数字が見込まれるタレントしか使わない。数字が見込めるということは、皆の共通の友人で、見ている人が多いから良いという理屈はありますが、それは段々、へたっていくばかりですから。残念ながら、数字が見込まれる実績のあるタレントと、数字が見込まれる実績のある企画しか通らないというのが、今の現状の8割、9割占めているような気がしますね。そりゃ、新しいタレントも出て来ないですよ。

それと僕が一番危惧しているのが、非常に細かい話ですが、1分刻みの視聴率というのがあるんですよ。正時、例えば8時台だったら、8時00分00秒と、01分00秒、02分00秒と、その時間毎にレーティングが出るんですよ。折れ線グラフが出て、何やっているときは落ちている、何やっているときは上がっているという非常にマイクロな数字が分かるわけです。だからそれを参考にして番組を作っているんですよ。僕はMBSにいる頃に、管理職の立場になったときに、1分刻みのレーティ

ングは見るな、と。たしかにこれをやっているときは上がっているし、それやっているときは下がっている。それは分かるけれども、だからそれを長くやって、こちを止めようというんじゃなくて、トータルでの番組の内容ですから。というんですが、なかなかそうはしないんですよ。それはなぜかという、管理職はそうは言っていないのに、作っている若い制作者がそうなんですよ。「あれ、これはちょっとなかなか難しい問題だ」と僕は思いましたね。つまり、若い制作者が近視眼的な視聴率主義なんです。だから視聴率が一番こだわっているのは、年寄りの管理職じゃなくて、1分刻みの視聴率を必死に見ている若いディレクターなんです。制作も報道も。だから不倫ネタはいいけれども、福祉ネタはやめておこうとかね。それがあらゆる場でそうになっている。番組自体の迫力は何なのか。例えば、ある番組で、これ面白いなという5分のコーナーがあれば、全部見るんですよ。それと54分番組で、54分ずっと見ている人なんて、実は統計上、ほとんどないんですよ。10分、20分見るのは、もの凄く見ている方なんです。ところがそんなもので、1分刻みの上がり下がりには意味がないのに、若い子はそれが分からないんですね。自分がVTR録ったところが数字良かったら、やっぱりVTRにしてスタジオで喋っているところよりも、VTRが高いとしたら、やっぱりこの内容の方がいいとかね。そういう風に考える癖はありますね。だから、皆、「いい子ちゃん」なんです。編成から「視聴率取ってください」と。編成は営業に「でないと、スポンサーが降りる」と言われたら、取ろうと思って、それをそのまま制作に伝えますよね。昔は、制作はそんなことはろくに聞いてなかったんですが、今は、皆、聞くんです。そりゃ数字取れないと、俺らの給料に関わるみたいな、そこが直結しちゃうから。でもよく考えたら、編集しているときに、もっと面白いもの、もっとつなぎ方、編集の仕方を変えたら面白くなるかなと思って、徹夜したことは何十回もあります。こうしたほうが視聴率取れると思って、編集したことは一回もないです。そのあたりが、「お前、何甘いこと言うとなねん」ということかもしれませんが、今の現状はそういうことですね。それは放送局が採る人間にもよるでしょうね。昔はいろいろな人がいましたもん。

—— ええ、そうですね。

田中氏 具体的には言えないですけど、多様性というか、いろいろな人がいて、それで全体の組織としては強かった。大学生の就職ランキング上位に来るようになった10年前か15年前か、それ以降ですね、「いい子ちゃん」が来るんです。僕も常務になって、最終面接でいろいろな人が来まして、人事には言ったんですよ。お前ら、馬鹿にしてんのかと。皆、一緒やないかと。例えば、20人来てね、10人採るって、どれ採っても、お前ら一緒やないかと。上10人と下10人を持って来いと。と言った

んですけど、もちろん、へへーんとか言って笑って聞いていましたけど、絶対直してくれないです。体育会系採ると言ったら、皆、体育会系ですし。それは、何て言うか、ちょっと怒ったり3Kやとか言うと、すぐ辞めるからですね。でもね、辞める子に優秀な子がいる可能性が高いんですよ。言われても、無神経な顔でおるやつに、ろくなやついませんからね。いや、あえて単純に言うと、体育会系でも微妙なことが分かる人もいますけどね。だから、多様性が失われているというのが、現場の空気としてあるんじゃないか。これは僕の勝手な仮説ですけども。もっといろいろな人を採って、“いい子ちゃん”ばかりじゃなくて、会社の役に立たないと思われる人間も採っておかないとあかんのかなと。物分りの良い優等生ばかりだとね、辛いなあとは実は思っています。

——— この会は、なんで今、テレビというものが面白くないんだろうというところから、スタートしました。そういったところに、ひょっとするとつながっていたのかもしれないということが、今、現場の方の口から、新しい情報として分かってきたんじゃないかという気がします。それから一方では、年寄りも、かなりテレビを離れています。八木さんみたいな方はかなり別格ですが、私も結構、テレビ見ているほうなんです。こういった会に、創成期から放送に携わってこられた方に来ていただいても、ほとんどの方がテレビを見なくなっていて。それで、「年寄り向けの番組がないから」と言う人もいますし、それから「果たして年寄り向けの番組とは何だ」。それから「年寄りは何をしてもいいじゃないか」という、いろいろな方がいるんですよ。田中さんは「高齢者とテレビ」に関しては、どのように思っているのでしょうか。

#### <M1, F1 (20-34歳)層の急激な減少 15年後のテレビ界に激変か>

田中氏 現状で言いますと、見るべき番組は非常に少ないと思います。実は、僕は放送局にいた後期にですね、一番困っていたというか、3年前に辞めたんですけど、在任中の最後の頃に一番つらかったのは、パーティーとかいろいろな懇親会とかで他業種の人と一緒にいるんですけど、そのときに「なんでテレビは面白くないんですか」「なんでどのチャンネル見ても、同じような番組ばかりなんですか」と聞かれて、なんか放送局を、あるいは会社を代表して答えないとだめというシチュエーションがあったんです。自分の作った番組ならまだしも、ありとあらゆるチャンネルをひとまとめにして聞かれてもなと。ただ、そのために見たくもない番組をたくさん見ました。要するに、言い訳するために。「いや、そうじゃないですよ、こういう番組もあるんですよ」とかね。非常にストレスがたまりましたが、3年前に辞めたのをきっかけに、しばらく見ないようにしました。多分、これは疲れているから、辞めた後、しばらくテレビは意図的に、3か月、半年と見なかったら、そのうち見

たくなるだろうと思ったんですが、全然なりませんでした。つまり地上波のテレビの良さも再認識できるかなと思ったんですが、1年超えても、見たいという思いは、ほとんど沸いてきませんでしたね。もちろんニュースは見て、個々の番組はチラチラと見ても。以前のように、特にゴールデンを見なくなりましたね。これはほとんど今も続いていますけども。だから面白くないんだなという意見があるというのは非常に分かります。本当にはないですね。それはなぜなのかと。

僕は今もテレビの制作会社で働いていますから、あまり過激なことを言うと、いろいろなところから怒られるので、毎日放送をはじめ、他のいろいろな地上波とか、NHK、BS、CSの番組やらせてもらっているの、あまり言えないんです。

やっぱりスポットだと思えますね。つまりF1、M1を意識しているんですよ。昨日もね、僕は実は毎日放送の視聴率の担当者に話を聞きに行ったんですよ。別の興味があってね。ティーンというのは13（歳）から19（歳）ですよ。その前にチャイルドがあって。13から19がティーンで、20から34がM1、F1。それで、34から49がM2、F2。50以上がM3、F3となっているけども、「M3、F3というのは、上は何歳なんや」と聞きに行ったんですよ。そしたら「99までです」と言うわけです。それなら見せてくれと。個別に分かるんだろと。見ると、確かに一番最高齢が96歳でした。それで86歳の人が3、4人。今の関西のビデオリサーチの機械が付いているところですね。機械が付いているところは全員分かるんですよ。だから何歳から何歳までで、86歳が3人いましたかね。それが朝のNHK見ているわけですよ。この人は、こう見てきて、ここで切ったなとかね。全部分かるんですよ。あまり言うとな、個人の情報に関わりますから、あまり言うなと僕は言われているんですけど。分かるんですよ。50から65はまだレーティング高いです。多分、もうすぐ経ったら、M1、F1がめっちゃ減ってくるんです。表を持ってきたんですけど、M1、F1が今は2070万いるんですけど、今のM2、F2は2700万いるんですよ。要するに10年か15年の間に700万人減っているわけですね。多分、この人らはM1、F1からM2、F2に移ったわけですから、ここ10年ほどで700万減っている。M1、F1は、10年後は1800万になる。この団塊の世代、私なんかはこの一番高いところですけど、この辺がこれからどうするかで、視聴率というのをベースにした、スポットで売って稼ぐというテレビのビジネスモデルが大いに揺らぐ可能性がある。これはどうなるのか僕も予測つきませんが、これは非常に大きな問題です。今の視聴率がどうのこうのと言っていたのが全部、無になるかもしれません。視聴率で全部ボロボロになる可能性もありますから。

この人口問題ともう一つは、テレビの機械の問題です。何か月前かに、パナソニックから、全局の24時間の録画内蔵の録画機が出ました。これは全局の番組が全部録れるわけです。タイムシフト視聴、つまり録画視聴しちゃうわけですよ。する

と全部、見たことにならないですから、視聴率はゼロですよ。そんなこといっても、録画機でわざわざ見るのもしんどい、皆がそんなことはしないんじゃないかと僕は言ったんです。

そしたら、もう一つは、今の地上波のテレビで、僕は5、6年、何年か買い換えてないから、デジタルになるちょっと前にデジタル用に買ってから買い換えていませんから。最近買った皆さんはご存知かどうか分かりませんが、戻しボタンというのが付いているんですよ。つまりテレビを見て、「あっ、面白いな」とか「ちょっと聞き逃したな」というときに、戻しボタンを押す。10秒戻す、30秒戻すというのがあるんですって。昨日見せてもらったんですけど。それを押すと、10秒なり30秒なり遡って、そこから見られるわけですよ。それはいいんですけど、そのまま見ていたら、戻しボタンを押した段階で、テレビは見ていないことになるんですよ。だから視聴率もゼロです。

——— そこでストップしちゃうわけですね。

田中氏 そうです。だから、そういう戻しボタンを使う人が増えたら、今100としたら視聴率が、10、20になる可能性もあるんですよ。そう積極的に視聴する人ばかりじゃないんでね、そんなにひどくは減らないと思いますけど。ある種、視聴率というシステムは崩壊する可能性があると思いますね。だから、ここ1、2年、あるいはもうちょっと経ったら、かなり変わるという可能性がありますね。一つは、作っている、誰向けに何をやっているのかというコンテンツの問題と、人口の問題と、それから機械の問題。いろいろなところでピンチが来るんじゃないかな。

ただ、今回のサッカーも、オリンピックもそうですけれども、今やっている大きな出来事、要するに人が多く集まる場を作るというのは、断トツですからテレビは。だからそういった集まったところで、LINEをやったり、Facebook やったり、Twitter やったり、これは付属的なことで、Facebook とか Twitter でそんなに人を集められないですよ。世界中、何十億人集めるのはテレビなんですよ。だからそこで、Twitter とか Facebook とかネットがどうこうとか、ケチなこと言わずに、それをもって新しい発明をする必要があるんですよ。僕は分かりませんが、要するに視聴率システムみたいなのに代わるね、新しい何かを見出さないと。誰か天才が出て来るとは思いますけれど。今の電通その他が作った、スポット大量投下システムというのは、ちょっとそろそろ終わりかなという気もしないではない。

メディアとしては、そんなに卑屈になる必要もないので、誰かが発明して欲しいと願うばかりであります。

——— かなり複雑なものが、これから新たな要素として出てくるみたいで、ますます、皆

さん頑張って長生きをしてですね、ちょっと行く末を見守ろうじゃありませんか。というわけで、今日は本当に面白いお話、新しい話と、それから今置かれている現状を現場の社長の口から、いろいろと伺いまして、ありがとうございました。ますますご活躍くださいませ。いい番組を作ってください。ありがとうございました。

以上